ホームレスですら裸足でいることはしない。むしろ、それらは裸足でいることの危険性と屈辱性を理解しているからこそ、そうしない。破傷風然り、傷口から侵入する細菌は馬鹿にならないのだ。

然らば、そうする者は酔っ払いか落伍者か失意の底にある者だと相場が決まっている。

リクルートスーツ姿のおんなは始発を求めて新宿駅に向かう。その手に持たれていたヒールはどこかに置いていかれていた。

始発まで三十分前までゴールデン街で呑んでいた。男からの誘いはすべて無視し、ただひたすらにウイスキーを飲み続けていた。そして始発まで三十分であることを確認し、その飲み屋街を出発したのだ。

彼女は大学在学中に初めてそんなことをした。授業で隣に座った男どもが自慢げに声高らかに話すようなことを、初めてした。それは嫌悪していたことで、嫌悪すべきことのままだったが、悪くはない、と彼女は思った。

鼻で息を吸った。そして顔をしかめた。ゴミの臭いと吐瀉物の臭いが入ってきたのだから当然だ。

ふらついた足が店先に置いてあるゴミ袋の山を揺らした。大量のネズミが湧き出て店と店の細い隙間に我先にと入って行く。彼女は以外にも顔をしかめなかった。それは驚きがただただ勝っただけのことだった。

「あははっ」

壊れたおもちゃのように、執着していた恋人にヒドいフラれ方をしてしまった淑女のように、彼女はわらった。ネズミの逃走を目撃した直後のわらいだったが、決してそのことが笑いの発信源ではなかった。

始発の時間を伝える放送を聞きながら、彼女は改札内に入ってすぐのところで一考した。一考と表現するだけあって、立ち止まって考えたのはわずか五秒にも満たない間だった。

「……」

何を考え、決めたのだろう。ポケットの中で震えるスマホを無視して、その足は奥多摩行きの電車につま先を向けた。靴はいまだ履かれていない。しかしつま先はぴんと伸びている。

座席に座れば眠気が彼女を襲うかと思われた。

しかし、初めて明確で強烈で鋭く重い挫折を経験したおんなは思いのほか強かだった。アメコミヒーローとまではいかなくとも、自身の傷をどう癒すべきかを傷つきながらも考えられるくらいの強かさを持ち合わせていた。

八両編成の電車。そのどこかには彼女以外にも乗客はいるかもしれないが、彼女の乗る車両内で息するホモサピエンスは彼女だけだった。

彼女は立ち上がってそのことを確認してから、しずかに泣いた。くちびるを噛みしめながら。

青梅駅で車掌に声をかけられるまで、彼女はねむった。